えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第92号
平成28年
(2016)
7－8

江戸東京博物館友の会会報

目次

竹内館長記念講演「浅草寺日記」の世界……1～2
第16回定期総会開催 ……2
『町方書上』全巻刊行完結記念セミナー「江戸の名主」…3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「帰ってきた台徳院殿霊廟模型」を見て／
　えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
第8回「えど友研究発表会」／本年度4月に更新された
　会員の皆さまへ ……5
友の会セミナー「武鑑を読み解く②旗本・御家人編」……6
友の会セミナー「山岡鉄舟の人間力」……7
見学会『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(4)……8
友の会特別観覧会「真田丸」……9
江戸博クリップ「科博のナゾ」……9
江戸名所図会を歩く…㉖
　[赤坂御門から崑崙山玉窓寺]……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

江戸東京博物館友の会　平成28年度定期総会　記念講演（平成28年5月27日）

「浅草寺日記」の世界

江戸東京博物館　竹内 誠 館長

「浅草寺日記」とは？

浅草寺にはたくさんの寺宝がありますが、その中に、335冊にものぼる江戸時代中期以降の日記、いわゆる「浅草寺日記」があります。浅草寺よりその日記の筆写と復刻を依頼された恩師の西山松之助先生が「浅草寺日並記研究会」を発足したのが昭和50年(1975)、今年で41年目になります。昭和53年に『浅草寺日記』第1巻を刊行以来、平成28年6月には第36巻を刊行予定です。

浅草寺は、貞享2年(1685)、東叡山寛永寺の支配下に入ります。そして元文5年(1740)、天台座主、比叡山延暦寺の貫主でもある東叡山門跡自身が浅草寺別当を兼帯することになり、寛永寺の出先機関として新たに別当代を設け、実質的な浅草寺の総責任者とします。そしてその別当代を補佐して一山・末寺・門徒関係のことを管掌するのが役者で、浅草寺一山三十四カ寺の選挙によって選出された2名が、月番で交代していました。

「浅草寺日記」は、寛保2年(1742)以降、これらの人々が記録した、別当代の「日並記」「雑簿」「記録」「日記」、役者の「御用記」「御用日記」、会計係である御小納戸の「日記」、観音堂の役人である堂番の「堂番日記」からなります。これらの日記を見ていくと、大変興味深い事柄がいろいろと分かってきます。

大川橋(吾妻橋)架橋一件

文禄年間、隅田川に初めて千住大橋が架けられます。江戸時代に入って、元禄期までに大橋(両国橋)、新大橋、永代橋と三つの橋が架けられますが、田沼時代に大川橋(俗称吾妻橋)ができました(安永3年・1774)。架橋に際して橋台となる六地蔵河岸が浅草寺領であることから、町奉行と浅草寺との間で、その代替地を巡ってのやりとりが日記に記されています。代わりの物揚場の他に新規築出し地も寺領に、との浅草寺の要求にタジタジとなりながらも「河岸は浅草寺領だが、川は公儀のもの」だと突っぱねる奉行側の様子などが詳細に記されています。

舟渡御の三社祭礼

浅草寺創建は推古天皇36年(628)です。漁師檜前浜成・竹成兄弟の網にかかった1寸8分の観音像を土地の豪族土師中知が小さな祠を立ててお参りしたのが浅草寺のそもそもの始まりとされています。この三人を神として祀ったのが三社祭礼の由来で、浅草寺縁起によれば、正和元年(1312)の神託に「神輿をかざり奉り、船遊の祭礼をいとなみ、天下の安寧を祈り奉るもの也」とあります。しかし明治以降はあまりこの舟渡御は行われませんでしたが、平成24年(2012)、三社祭礼700年を記念して舟渡御が再現されました。

鷹の餌鳥一件

鷹狩は将軍や大名など武士のたしなみでした。その鷹狩に使う「御鷹」の餌として小鳥が必要ですが、関東一帯が大洪水に見舞われた際、餌鳥が不足したため、寺社奉行から浅草寺へ、境内の餌鳥を捕獲したい

旨の要請がありました(天明６年・1786)。浅草寺側は「当境内は往古より殺生禁断の場所である」、「御入国最初の御祈禱所で古来より由緒あり」、「輪王寺宮の仰せで天下安全・国土豊饒の祈禱中であるから無理」などいろいろ理由をつけて拒絶します。最後は江戸城大奥の名を出して、祈禱中は餌鳥役人を入れないようにします。大奥の権勢がいかに強かったかをうかがい知ることができます。

行き倒れ・捨て子

お寺で行き倒れるケースが意外と多く、天明７年の場合で18件、その他、心中、自殺、捨て子などがあり、その都度克明に記録されています。

将軍・世嗣の浅草寺参詣

将軍家斉(公方様)と将軍世嗣の家慶(大納言様)父子は浅草寺が大好きで、一緒にまたは単独でたびたび訪れており、その御成の様子が「浅草寺日記」に残されています。享和３年(1803)の御成では、８日前からその旨が伝達され、江戸城から検分がやって来て泊まり込みで準備にかかります。客殿玄関を修復するため、浅草寺お抱え棟梁２人の指揮の下、連日の突貫工事、御成前日には小普請方本隊が準備のために泊まり込み、本堂内陣、外陣など徹底的に清掃、目障りなものはすべて取り外されます。別当代はじめ、一山の僧侶が本堂に集まり開帳の支度をします。

将軍の参詣には、本堂での開帳本尊の御拝の儀を終えた後に、御膳所での食事休憩の他、曲馬やこま廻しの芸の上覧、さらには見世物小屋などのある奥山の所々を見物するなど、たくさんの楽しみがありました。お城での窮屈な生活を脱け出して庶民の娯楽を存分に堪能したことでしょう。また、御成跡開帳(おなりあとかいちょう)といって、その後、将軍からの恩恵という形で一般に開帳しています。これには政治的な意味があり、庶民に人気の高かった浅草寺が幕府と民衆を結びつける重要な役割を果たしていました。

雷門の再建

「雷も諸国へひびく名所なり」の雷門は浅草寺の総門(大門(だいもん))です。風神・雷神が置かれていますが、江戸時代から雷門といわれています。川柳「風の神　雷門に居候」

雷門は寛永12年(1635)に創建され、その後幾度となく焼失しています。天明の大飢饉以降は寛政７年(1795)に再建され、広重の絵などに描かれています。しかし、慶応元年(1865)に再び焼失、昭和35年(1960)、松下幸之助の寄進により再建されて現在に至ります。「浅草寺日記」には「雷門は並の御門とは違うのでいい加減な作りはできない」と記されています。また落成後、提灯を奉納した人々の名も記録されています。また、雷門から本堂までの敷石について、浅草寺観世音信心連中頭取の者共より「雨天の節は水はけが悪いので、快く参詣できるよう、幅三間ほどの敷石を奉納したい」との願い出があり、これが実現しています。

「浅草寺日記」には「温座陀羅尼(おんざだらに)」などの宗教行事が基本的に多数出てきますが、境内に奥山を控え、聖と俗とを併せ持つ非常に魅力あふれる日記となっています。

【記録】文・写真：広報部会・岡本　脩

第16回定期総会開催

会員数順調に回復、各種催事参加者も増加の27年度

畠中会長

５月27日(金)に友の会定期総会が開催されました。定刻の13時15分ちょうど、司会者・柏木さんのきれいな声がマイクから流れると、場内は緊張した空気に包まれました。畠中会長の挨拶に始まり、来賓を代表して江戸東京博物館の小林副館長からご挨拶をいただきました。続いて、議長団―議長に宮さん(事業部会)、副議長に早川さん(総務部会)、書記に光田さん(広報部会)、内山さん(事業部会)―を選出、宮議長から本日の出席数220人、委任状提出者637人、計857人につき、定足数を満たしており、総会が有効に成立している旨報告がありました。

この後、審議に入り「第１号議案　平成27年度事業報告ならびに収支決算報告」、「第２号議案　平成28年度事業計画案ならびに事業予算案」について、各担当者が報告・説明しました。どちらの議案についても質問や意見などはなく、拍手をもって承認されました。担当者は事業部会が小林さん、広報部会が前田さん、総務部会が辻井さん、翻刻プロジェクトが丹羽さん、会計報告が菊池さん、監査報告が松原さんです。

会員数は一時減少しましたが、その後順調に回復、この年度末では1742人と26年度末に次ぐ高い数値になっています。また、各種催事への参加者も増えていますが、会員のさらなる参加意欲を高めるための工夫や分析が必要との指摘がありました。

ついで、友の会全般にわたっての意見・質問には２人の方から、サークル活動に関する情報開示が少な過ぎるのではないか、江戸東京とうたいながら、江戸のことばかりでほとんど東京の話がない、などの指摘がありました。今後、改善できるところは直していかなくてはならないと思います。最後に、会場入口に設けた“熊本地震”義援金箱に15,122円の寄付があり、感謝しますという畠中会長の言葉で総会は終了しました。

15時からは今年で14回目になる竹内館長の〔「浅草寺日記」の世界〕と題する講演があり、あの雷門が江戸時代から続けてあったわけではない、ということを驚きながら聞きました。17時からは７階「桜茶寮」で竹内館長以下５人の館の人を交えた会員交流会が賑やかにあり、和やかなうちに18時30分ごろ散会となりました。

【取材】文・写真：広報部会・福島 信一

『町方書上』全巻刊行完結記念セミナー（平成28年3月31日）

江戸の名主

講師　髙山　慶子さん（宇都宮大学准教授）

このセミナーは、『町方書上』が完結したのを記念して開催されたものです。講演に先立ち、江戸博学芸員市川寛明さんより次のようなご挨拶がありました。

「『町方書上』は江戸研究に必要不可欠な史料ですが、あまりに膨大であるため、これまでは部分利用しかされてきませんでした。今回、友の会メンバーが7年半という長い年月をかけて、全9巻(内1巻は索引)を翻刻されたことは、望外の喜びであり大変意義のあることです。この完成によって、江戸研究が飛躍的に進むことが期待されます」

引き続き講師の髙山慶子さんが紹介され、講演が始まりました。

はじめに

『町方書上』とは、幕府が計画した『御府内風土記』編纂の資料とするため、名主たちに町の由来や現況など、基礎データを提出させたものです。「草創(分)名主」が支配する一帯など一部地域の分は現存しませんが、それでも江戸研究に欠かせない史料です。草創名主とは、家康と共に江戸へ来たなどという最初期の名主のことで、町方の中心地であった日本橋地域、現在の中央区一帯を支配していました。本セミナーでは、『町方書上』が名主の下で編纂されたことに鑑み、『町方書上』に着目しながら名主についてお話します。

『町方書上』と名主

友の会翻刻版の『町方書上』には、第9巻として総索引が付されています。そこには「名主」の項目があり、その内訳に「古町名主」(草創名主以外で「古町」と呼ばれる日本橋周辺地域を支配する名主)、「下名主」(伝馬町の名主が離れた地域を支配地に拝領したとき、その支配の委託を受けた名主)、「橋懸り名主」(永代橋担当でほとんどは橋の東側の深川地域の名主)、「見立名主」(名主が不在になった際、町内居住者が推挙して決める名主)の項目が見られます。さまざまな名主が存在したことを確認できるでしょう。

名主の種類については、筆頭に「草創名主」を置き、「古町名主」、「平名主」(草創と古町以外)、「門前名主」(寺社の門前)とする分類がよくなされます。「古町名主」は『町方書上』にも見られることから、当時からそのように呼ばれていたことがわかりますが、「平名主」と「門前名主」は『町方書上』では使用されておらず、当時の呼称ではないことも確認できます。

また、『町方書上』各巻の巻末にある「付表・文政期町の概況」は、各町の情報が表で一覧できるように工夫されています。そこでの町の並び順、つまり『町方書上』における町の掲載順は、名主の支配地域ごとではなく、地理的な位置などによるとみられ、同じ名主が複数の町を治める場合、名主の名前が分散して表に出る事例が確認されます。これは、名主の支配地域ごとに町々がまとめて記される『江戸町鑑』とは記載形式が異なります。幕府編纂の『町方書上』では、名主の支配地域のまとまりはそれほど重視されていなかったとみられ、名主の支配地域は幕府が規定したのではなく、町の側で形成されたことを示唆すると考えることもできるかもしれません。

このように、友の会翻刻版の『町方書上』を通して、さまざまなことが明らかになり、考察を深めることができるようになりました。

江戸の名主制度

『守貞謾稿』によると、江戸の名主は世襲専業であり、3～5町ごとに1人の割で置いています。当時江戸の町数は1641町、名主は284人、うち草創名主は30人となっています。奉行所へ出る際は肩衣を着、脇差を差すことができました。

なお、名主職はひそかに売買されていました。表向きは養子として家名を受け継ぎますが、裏では金銭のやりとりが行われていました。

大坂町奉行から江戸の町奉行へ出された質問状「名主役勤方自身番屋等之儀ニ付調」と、その回答からは奉行から見た名主の様子がはっきりします。すなわち、江戸の名主が交替する際の許可は、奉行が出します。ただし、奉行から直接ではなく町年寄から伝えることになっています。以下、奉行と町年寄との関係などについて一連のやりとりを読むと、名主の支配地域や役料など、名主の制度は町人側で作られ、幕府は必要最小限の事項を把握するに留めるものであることが見えてきます。

名主の特徴

名主は名字をもっていますが、名主の仕事で奉行所へ出向いた際は、名字を名乗れませんでした。ところが、伝馬役(幕府の仕事)の際は名乗れました。名主が町の代表であり、幕府の役人ではないということがうかがえます。また、町内の日常事は月行事(大家)に任せ、そこで決まったことに名主が承認する形をとることもあり、名主が必ずしも直接住民と接触するとは限りませんでした。また、名主の家系の故事来歴を記した由緒書には、『町方書上』に掲載されたものとされなかったものがありますが、掲載されたものの方が信憑性が高いと判断できるでしょう。

終わりに

ウィキペディアの「文政町方書上」の項目には、国立国会図書館のデジタルコレクションで『町方書上』の原本がデジタル画像で閲覧できると共に、江戸東京博物館友の会翻刻の『町方書上』が紹介されています。デジタル版の原文書と友の会翻刻版を対比して読むことも可能になり、今後の利用の広がりと研究の進展が期待されます。　　参加者106人。

【記録】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・前田太門

会員からの投稿

「帰ってきた台徳院殿霊廟模型」を見て

松　本　美智子

『えど友』90号に「帰ってきた台徳院殿霊廟模型―増上寺宝物展示室―」という、江戸に興味のある人なら誰でも是非見に行きたくなるような魅力的な記事が掲載されていた。それだけではなく、これには「増上寺宝物展示室招待券プレゼント」というおまけまでついていた。それにくじ運の悪い私が、奇跡的にも抽選に当たって念願の霊廟模型を見ることができたのである。楽しみにして行ってみると、『えど友』の紹介文通りの見応えのある模型だったので、その御礼の報告を書かせていただくことにした。

まず、10分の1という規模の大きさと豪華さに驚かされた。実際の大きさに近い分だけ、当時の霊廟の立派さ、美しさをリアルに想像することができる。特に、屋根を外し建物内部を見渡すことができる展示は、普段めったに体験できないだけに貴重であった。2代将軍秀忠を弔うために寛永9年(1632)に造られたこの霊廟から、江戸時代の権力者の極楽浄土への願いを偲ぶことができるとともに、徳川の栄華の力を具体的に見ることができた。そして、あらためて、この260年の戦無き世がもたらしたものの大きさが、今の東京の礎となっていることを思い返す。

霊廟の模型は明治43年(1910)の日英博覧会に東京市の展示物として出品され、平成26年にこの寺に英国ロイヤル・コレクションとして里帰りできたことは感動的でさえある。長い年月を経て、大勢の人々の大変な苦労と努力によって実現されたことがうかがわれた。当時の豪華絢爛さを復元した模型から、日本の匠たちの技術の高さが伝統として現代にまで継承されてきたことを知り、これが今後も継承されてゆくことを願った。

この貴重な霊廟は、昭和20年の東京大空襲で惜しくも焼け落ちてしまうという悲惨な出来事に見舞われる。子供の頃、この辺りに住んでいた人たちが訪れて「幼心には、赤い炎に、青や紫の色がまじり、普通の火事とは違って美しく見えたけれど、こんな立派なものが焼ける色だったんですね、本当に残念なことをしました」と語っていましたよ、という会場案内の人の話がとても印象に残った。

皆様も是非一度訪れて、台徳院殿霊廟の素晴らしさを味わってみてはいかがでしょうか。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

4月19日(火)鈴木紘一さんの月番解説で「古今亭園菊門下気鋭の真打二人会」として、古今亭菊之丞による「酢豆腐」「景清」と古今亭文菊による「百川」「四段目」「夢金」の落語鑑賞をした。参加者17人。

5月17日(火)伊東敏男さんの月番で本人の作った冊子を手に、千住・王子の落語散策をした。落語「真景累ヶ淵」「四宿の屁」「藁人形」は小塚原の辺りを題材としている。飛鳥山公園は落語「花見の仇討」の舞台である。名作「王子の狐」の舞台で散策を終わった。参加者13人。

◆藩史研究会

4月22日(金)土屋献一郎さんが「下野国小山氏の歴史」を発表した。小山藩は慶長13年、本多正純が立藩したが元和5年、正純の宇都宮移封により廃藩となり古河藩に吸収された。附論として「関東戦乱と下野小山氏400年の歴史」を取り上げ解説した。参加者23人。

5月13日(金)安倍良男さんが「米沢藩史」を発表した。米沢藩主上杉氏は越後上杉謙信を祖とする。関ヶ原後は家康により米沢30万石に削減移封された。3代綱勝に嗣子なく、吉良家から養子を迎えて4代綱憲とした際、15万石に減封。こうした領地の縮小・減封の中、9代治憲(鷹山)の藩政改革などもあり、上杉家臣団は維持された。資料を用いての検討・考察で、意見交換も活発だった。参加者12人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会

4月14日(木)米屋久右衛門の書いた明治3年の「町用日記」P65～72までを読む。一家5人が傷寒を煩い困窮した桶職の久次郎(32歳)に白米弐斗五升、銭五貫文が町会所から与えられた報告や、すでに3月に役職が廃止された町年寄(ちょうどしより)にやりかけの戸籍調べを早く出すようにとの東京府からの通達など記述。参加者11人。4月29日(金)休会。

5月12日(木)P72～83まで読む。こより花火、鼠花火、竹花火などの打ち上げ・売捌き禁止、銭湯の男女入込禁止、当月の組合入用など記述。参加者10人。

5月27日(金)P83～94まで読む。常陸屋幸助の女取戻し出入り一件の始末、書役平蔵に関する不束(ふつつか)なことが数々露見したという記述。参加者9人。

◆江戸東京を巡る会

5月15日(日)駒込駅から無量寺・旧古河庭園と大谷美術館(旧古河邸)・平塚神社・城官寺を巡った。大谷美術館は入館経験者も少なく、コンドル設計の大正期の有名な邸宅を解説つきで見学できた。小川治兵衛設計の庭園も解説つきで堪能でき、洋風庭園にはバラが満開で大勢の来園者と共に楽しんだ。参加者40人。

◆『江戸名所図会』輪読会

4月21日(木)松本美智子さんの担当。新宿区喜久井町、馬場下町、早稲田鶴巻町の一帯にある寺社は昭和20年の戦災でことごとく消失したが、深川の心行寺に合祀された西方寺以外の感通寺、誓閑寺、高田八幡宮(穴八幡)などほとんどの建物が、元の場所に再建されている。高田八幡宮(穴八幡)境内の菩提樹のみが400年の月日を経て現存しているという。参加者14人。

5月19日(木)佐土原一浩さんの担当。穴八幡の八幡坂を挟んだ向かい側の東のエリア。高田稲荷明神社は元禄の頃からエノキのご神木から湧いた霊水が眼病に効くと評判になり、水稲荷神社と呼ばれ今に続いている。

昭和38年、早稲田大学商学部の建設に伴い、現甘泉園の地との土地交換に応じて移転した。高田富士山も同じく移築された。水稲荷と同じ敷地内にあった毘沙門堂、両者の別当寺だった宝仙寺は現在もほぼ同じ場所に建っている。参加者16人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

4月28日(木)『えど友』第60号10頁の「落語で江戸散歩⑲おせつ徳三郎」をなぞって歩いた。大店の娘おせつが住んでいたという横山町の問屋街を通り抜け、深川では六間堀跡、深川神明宮、木場公園などを見学し、さらにおせつ徳三郎の二人が「お材木(お題目)のお蔭で助かった」という木場の雰囲気を木場親水公園で味わった。洲崎神社を参拝し、解散した。参加者24人。

5月1日(日)前回と同じコースを巡った。参加者45人。

5月19日(木)今回で歩く会も最終回。『えど友』連載企画の最終回第66号10頁の「落語で江戸散歩㉕加賀の千代」をなぞって歩いた。JR田町駅に集合。札の辻跡、元和キリシタン遺跡、亀塚公園で亀塚などを見学したあと、薬王寺へ向かった。ここで「朝顔につるべ取られてもらい水」という句ゆかりの井戸というのを見学した。つるべのついた井戸があり、その旨を記した石碑もあった。幽霊坂から玉鳳寺(おしろい地蔵)、明王院に参拝、桜田通りに面して立つ長松寺の「史跡 荻生徂徠墓」の碑を見てから、大信寺(三味線製作の祖・石村近江の墓)、魚籃寺、道往寺、最後に泉岳寺で四十七士の墓に参拝し散会した。参加者42人。

5月22日(日)1回目と同じコースを巡った。参加者35人。

◆日本の大道芸伝承会

4月13日(水)本年11月5日(土)に開催予定の深川江戸資料館創立30周年記念イベントへ応援出演することになった。いつまでも続けられるよう発声練習(外郎売り、がまの油売り)のあと、基礎練習をしっかりした。参加者5人。

5月11日(水)イベントでは「江戸・東京の大道芸」と銘打ち、これまで演じたことのない日本の大道芸を含め披露紹介するつもりである。皆、気持ちを新たに練習に励んだ。イベント出演という目標があると、それなりに力が入ったように思う。参加者5人。

◆江戸を語る会

4月30日(土)富士松 松榮太夫さんが〔浄瑠璃「恋娘昔八丈」に見る江戸の罪科と刑罰〕の演題で発表した。「恋娘昔八丈」は享和11年にあった実際の事件をネタに脚色したものとのこと。この物語から、具体的に江戸時代の罪科と刑罰がどのようなものであったか、解説の中で氏はその美声で浄瑠璃の哀切を帯びた語りを織り込みながら詳しく解説した。ともあれ、浄瑠璃の一端を楽しむことができ、また、その中で、江戸時代の刑罰制度を学ぶことができ、非常に有意義な会となった。参加者12人。

◆かっぽれの会

4月、5月休会。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班「大伝馬町名主馬込家文書」

B班発足後、『類聚撰要』(雉子町名主斎藤月岑が編纂した町触集の写本)の解読を進めていたが、この江戸博所蔵『類聚撰要』を底本に既に翻刻がなされているとの確かな情報に接し、急きょ「大伝馬町名主馬込家文書」に切り替えた。

馬込家文書の内、7冊ある「旧記」から着手、「旧記三」と「旧記七」は題簽(だいせん)(書名・巻数などを記して和漢書の表紙に貼付した細長い紙片)があるものの、残り5冊は題簽がない。「旧記三」から翻刻に入り、次回以降、順次、内容の紹介をする予定。

◇参加者：4月7日(木)A班7人。B班6人。4月21日(木)A班8人。B班8人。5月5日(木)A・B班とも休会。5月19日(木)A班8人。B班7人。

友の会めも(開催日と人数)

平成28年4月～5月

◆平成28年度江戸東京博物館＆友の会連絡協議会 4月26日(火)博物館・竹内館長以下6人、友の会・畠中会長以下13人。◆役員会 4月12日(火)15人。5月10日(火)11人。◆事業部会 4月5日(火)24人。5月3日(火)20人。◆広報部会 4月19日(火)10人。5月17日(火)9人。◆総務部会 4月26日(火)22人。5月24日(火)22人。◆古文書講座 入門編：5月11日(水)午前113人・午後105人。初級編：5月18日(水)午前77人・午後66人。中級編：5月21日(土)午前52人・午後29人。

第8回「えど友研究発表会」

◆今年も会員の皆さんによる研究発表会を開催いたします。

演題については昨年と同様に2題を予定しております。

発表者及び演題は次のとおりです。

○早川良躬さん
「家康・鴻巣御殿とその周辺」

○内山文伸さん
「田端文士村の成り立ち」

会員の方が日頃の研究・学習を発表する機会となりますので皆さまの多数のご参加をお待ちしております。

- 開催日：8月2日(火)
  13時～15時30分
- 申込締切：7月21日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100人
  同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員・同伴者とも無料

【企画担当責任者】内山文伸(事業部会)

～本年度4月に更新された会員の皆さまへ～

会員証の有効期限が2016/04/30となっていて、4月に更新された方は本来であれば有効期限は2017/04/30となりますが、パソコンの不具合により、たとえば2017/05/13のように記載されているケースが一部発生してしまいました。

このような場合でも次回の更新月は4月と変わりなく、有効期限は2017年4月30日となりますので、例年通り来年3月末には更新のご案内をお送りします。

該当される会員様にはご迷惑をおかけしますが、どうぞご理解いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。 【友の会事務局】

第163回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年4月16日）

武鑑を読み解く②旗本・御家人編

講師　滝口　正哉さん（立正大学・成城大学非常勤講師）

３月12日の友の会セミナー「武鑑を読み解く①」では大名編についてお話ししました。今回は本丸の老中・若年寄以下の幕府役人を役職ごとに収録した３巻を中心にお話を進めます。また西の丸役人について載っている４巻などについても触れます。

旗本・御家人とは

３巻は役職武鑑ともいわれ、幕府の役職に就いている徳川将軍家直属の幕臣について書かれています。旗本と御家人をひとくくりにして幕臣といいますが、両者はどのような違いがあるのでしょうか。

禄高１万石に満たない家で御目見以上の家が旗本です。家自体が徳川家に仕える形式をとる世襲の家柄で、５千余家あったといわれます。住まいは幕府から与えられた拝領屋敷ですが、大名は複数の屋敷を持っているのに対して、ほとんどの旗本は一つだけです。

御家人は御目見以下の家で、「抱席」という非世襲の一代抱えが原則で、幕末には1万7千家ほどありました。実際には早いうちから息子に手伝わせ、仕事に慣れているからという名目で、引退後はその息子に役を継がせるという世襲に近い形式をとるのが一般的でした。しかし、中には御家人株の売買によって血筋が変わることもありました。勘定方の役職は実力主義で有能な御家人が旗本に昇格することもありました。また御家人は組屋敷で同僚と軒を並べて住んでいました。

旗本・御家人は役職に就かないと出世できませんが、高家と交代寄合は別格でした。高家は幕府の儀式や朝廷と幕府を結ぶやりとりを行っており、文政5年(1822)の記録では26家あります。この中には、室町幕府の要職を務めた名家である畠山家や、織田家など戦国の名将の子孫が含まれています。交代寄合は参勤交代をする旗本で、有名な豪族の子孫や規模を縮小した大名の子孫などです。

3巻を読み解くポイント

３巻は本丸の老中、若年寄以下の役人を役職名のいろは順で収録しています。その役職が老中支配か若年寄支配かが記載され、江戸城内の詰所、役高・役料、頭・奉行以下の役人の名前と続きます。さらにその役人の家禄、屋敷、父親の名前、いつからその役に就いているか、家紋、鎗印、用人(家来)などが記載されています。

役高欄にはそのポストに就くために必要な役高が記載されています。例えば目付は1000石となっていますが、本来は有能な旗本でも500石の旗本では就任できないことになっていました。1000石は持っていないと出費が多くて目付は務められないからです。８代将軍吉宗がこの障壁を解消して優秀な人材を登用するため、足りない分の石高を就任中は補って支給する「足高の制」を定めたことはよく知られています。役高の所に「持高」となっている役職がありますが、役高は決められていない、すなわち足高はないという意味です。

次に石高について説明します。3000石収穫できる領地を持っている知行取りは3000石と表されます。蔵米取り100俵は、幕府の直轄地から年貢として収められた米蔵から100俵支給されることを表します。知行取りは領民から収穫の35～40％を年貢として取り立てますから、例えば100石の収入は35％の35石ほどです。1俵は3斗5升が標準なので100俵＝35石で、100石と100俵は同じ禄高となります。知行取りは領民を支配し労働させることができますが、年貢米の輸送費用がかかることや凶作のリスクもあります。石高が低いほどこのリスクが高くなるため、知行取りは500石を超えた者がなるようにというガイドラインがあったようです。

武鑑の4巻とその他の名簿

４巻は西の丸役人の武鑑です。文化９年(1812)、11代将軍家斉の時代のものを見ると「大納言様」というのは息子(後の12代家慶)ですが、すでに老中、側用人はじめ、本丸より小規模ですが役人がしっかり付いています。

幕末の安政３年(1856)に作られた「御三家方御付」という付家老が載っている薄いものもあります。また３巻目だけをダイジェストした横長の袖珍本は、役人の情報を必要とする人たちが携帯できる便利なものでした。やはり幕末には、14代将軍家茂上洛の時に従った役人のリストが瓦版として売られました。また「県令集覧」という幕府直轄地の代官以下の役人名簿もありました。地方の庄屋などが代官とやり取りするのに便利だったのです。

やはり袖珍本で明治維新後の「静岡御役人附」という静岡に移った旧幕臣のリストがあります。慶応４年(1868)５月24日、徳川家達の静岡移封決定から明治４年(1871)の廃藩置県まで静岡藩70万石が存在したのです。

武鑑を含む名簿的な資料はほとんどが活字化されていません。今回は活字化された須原屋版を読んでみましたが、武鑑は旗本・御家人の情報を知るには重要な史料であるということを分かっていただけることと思います。

レポーターからひとこと

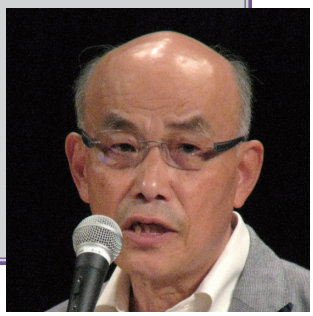
配布資料(武鑑３巻)の終りの方に載っている「御鏡師中島伊勢」は葛飾北斎の実家というお話がありましたが、北斎ファンとしてはちょっとした感動を覚えました。武鑑をひも解いて知っている名前などを見つけられたら楽しいことでしょう。　　参加者199人。

【記録】文・写真：広報部会・大橋弘依

第164回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年5月14日）

山岡鉄舟の人間力

講師　山本　紀久雄さん（山岡鉄舟研究会会長）



一転、和平路線をとった徳川幕府

慶応4年(1868)1月、鳥羽・伏見の戦いで敗れた15代将軍慶喜は大坂城を6日抜け出し、11日夜半品川沖に着き、12日江戸城に入りました。江戸城では、錦の御旗を掲げた官軍と戦うか、和平を結ぶか大評定が続きます。和平を唱えるハト派の勝海舟に対し、武闘派の小栗上野介や榎本武揚などのタカ派が一時主流となりましたが、その後一転、徳川幕府は和平路線をとります。もしこのとき、武闘派の言いなりに戦いに進んでいたら、大きな戦争となり江戸城の無血開城は無かったでしょう。これが1月の15日のことでした。

どうやら勝を苦手としていた慶喜ですが、今は勝に頼るしかなく、官軍との和平を彼に託しました。最初は西郷隆盛を知っている勝が自ら和平交渉に行こうと提案しますが、万一勝を失ってはもう後がない、と慶喜に拒否されます。その後は、和宮や天璋院、さらに上野の輪王寺宮まで担ぎ出して和平を求めますが、いい結論は得られませんでした。誰か西郷と渡り合える者はいないか……このような複雑な場面で登場してきたのが、全く無名の山岡鉄舟でした。

駿府への出立

そのとき33歳だった鉄舟は、謹慎していた慶喜を警護するために寛永寺周辺を見回る警備兵にすぎませんでした。彼を推薦したのは鉄舟の妻の兄、槍の名人の高橋泥舟（でいしゅう）でした。

慶喜公に一度も会ったこともない鉄舟でしたが、二心将軍と呼ばれていた慶喜に、状況が変わったら、また方針を変えるのではないか、と詰問しています。結果、慶喜から間違いなく別心無しという言質（げんち）をとった鉄舟はこの使命は絶対に成功させると自分を追い込んだことでしょう。しかし、一体どうやったらいいのか分からなかった鉄舟は、多くの幕閣などを訪ねて助力・相談を請いますが、誰も相手にしてくれませんでした。そうして、最後に訪ねたのが勝海舟でした。虎尾（こび）の会で清河八郎と付き合っていた鉄舟を危険人物と警戒していた勝でしたが、自宅に訪ねてきた鉄舟と会うことになります。鉄舟に会った海舟は日記に「旗本山岡鉄太郎に逢う。一見その人となりに感ず」と書いています。この日が3月5日です。勝は鉄舟が駿府にいる西郷との交渉に行くことを了解し、鉄舟は薩摩藩邸焼き討ち時に捕えられ、海舟邸に預けられていた同じく虎尾の会の仲間だった益満（ますみつ）休之助と一緒に、官軍でいっぱいの東海道を駿府に向かいました。が、途中休之助は鉄舟のあまりの速足のせいもあってか腹痛を起こし落後、箱根の山からは全くの一人旅となりました。

西郷、鉄舟会見

箱根の山を逃げ隠れしながら西に向かった鉄舟は、あの侠客清水次郎長の世話になって駿府にたどり着きます。そして東征軍の西郷との会見が3月9日。和平への道は、ただ一つのことにかかっていました。イノチ、慶喜の命です。あとは東征軍の言いなりでしたが、これだけは譲れません。ところが西郷は、これは朝命で、慶喜公は備前藩に預ける、の一点張りです。この時点で備前藩は官軍側になっており、そこへ移すことは即、死を意味しました。鉄舟は武士道精神に基づき鋭く反論しました。「もし、あなたの君主島津公が同じ立場に立たされたら、あなたは殿様を敵方に渡しますか？」それを聞いた西郷はしばし沈黙した後答えました。「分かりました。慶喜公のことは拙者が預かりもうす」と。この一言で江戸城の無血開城が決まったのでした。西郷は鉄舟という人間像の中に無類の侍魂を見出したのです。後日3月13、14日の西郷と勝の会談は後の段取りの確認であり、事務手続きのようなものでした。その際、西郷が勝に述べたという記録が残っています。「徳川さんはえらいおタカラをお持ちですね」「？？？」「命も、金も、名誉もいらぬ。ああいう人でなくては天下の大業は成し遂げられません」と。

明治天皇との17年

明治天皇は日本の最も偉大な統治者であった、ということに異論はなかろうと思いますが、その天皇を扶育した人が侍従として36歳から53歳まで終生仕えた鉄舟でした。

鉄舟の厳しい禅修業を宮城で見ていた天皇はそこから学び、自分を磨いていったと思われます。京都の公家社会で女官たちに囲まれて育った天皇と、赤貧洗うがごとしの生活をしてきた鉄舟、境遇が違い過ぎる2人でしたが、ともに大酒飲みでした。2人で酒を酌み交わしながら、天皇は世の中のこと社会のこと世界のことを身に付けていったことと思われます。

東征軍参謀として明治維新を実質的に成し遂げたのは西郷隆盛であり、明治の45年間に日本を冠たる列強に築き上げ、大正、昭和、平成とつなぎ、今の日本を先進国に位置づけた始まりは明治天皇の治世でした。その偉大なる2人と深く関係を築いたのは山岡鉄舟で、人間を鍛え続けると「こうなり得るという実態・境地実像」を遺したのが鉄舟です。

我々はこの世に生を受け、一人一人が意義ある存在として今ここにいる。鉄舟は自らの奥底深く存在する意義を、厳しい修行で到達した境地から発揮させ業績を遺しました。厳しい修行を課せられない我々が、鉄舟から学ぶとするならば、自らの生きる意義を再確認することではないでしょうか。それが現代的な意味での鉄舟の教えだと思います。意義を探し、求め、それを見つけた人は素晴らしい人生を送れるのだと、鉄舟は語っているのです。

参加者156人。

〔山岡鉄舟研究会ＨＰアドレス
http://www.bushi-do.org/〕

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 28 年 4 月 24 日）

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町（4）

雨上がりの曇り空の下、中野坂上駅の青梅街道と山手通りの交差点を起点に挿絵４枚の地を訪ねました。この辺りは武蔵野の中央に位置することから中野と呼ばれ、現在の JR 中野駅南側は中野台地といわれたそうです。

中野宝仙寺

交差点から青梅街道を西へ進むと挿絵１枚目の宝仙寺があります。寛治年間（1087～94）源義家が奥州征討（後三年の役）の帰途、大宮八幡神

▲宝仙寺

社（杉並区）傍らに寺を創建しました。その時、土地の稲荷の神が現われて義家に一個の珠（たま）を与え、「世にも珍しい宝中之仙で、武運長久が叶う」と言って去ったので、宝仙寺と号することになったそうです。その後永享元年（1429）に現在の地に移建されましたが、火災や戦災で再建を繰り返し、ほぼ現在の姿になったのは意外に最近のことで昭和48年（1973）です。境内には中野町役場跡の碑や、そばを挽く石臼を供養のために積み上げた石臼塚があって、興味は尽きません。本堂に向かって左手に平成４年に再建された美しい三重塔、その奥に墓地があります。中野区内きっての名家で、この地域の行政に貢献した堀江家の墓所があり、その繁栄ぶりを物語っています。

宝仙寺三重塔記念碑

宝仙寺を後に寺の裏道を歩き山手通りに出て中野坂上方向へ。区立第十中学校敷地内にある宝仙寺三重塔記念碑を訪ねました。挿絵２枚目の三重塔は、寛永13年（1636）寺の東のこの辺りに建立されたのですが、今は再建されて境内にあるというわけです。寺の所有地がいかに広大だったか分かります。また施主は一村民だったそうで、武士や名家出身者などではない点が珍しい建造物です。挿絵にあるように、高台の林にそびえ立つ三重塔は、青梅街道を淀橋から中野坂を登ってきた当時の旅人には神々しく見えたことでしょう。

▲象小屋跡

象小屋跡を経て成願寺へ

三重塔記念碑から山手通りをさらに南下して起点の中野坂上交差点を過ぎ３枚目の挿絵、成願寺（じょうがんじ）に向かいます。途中、朝日が丘児童館敷地に立つ象小屋跡の立て札に立ち寄りました。享保13年（1728）ベトナムからやって来た象が将軍吉宗に献上されました。浜御殿で飼育された後、中野村の源助に下げ渡され、源助はこの地に象小屋を建て２年間飼育していたそうです。

山手通りに戻り、中野長者の寺、成願寺へ。建物の軒先などにたくさんの大観通宝が見られるのはなぜでしょう。約600年前、貧しい馬の飼育販売業者だった鈴木九郎は、浅草の観音様に「馬が売れて対価に大観通宝が入っていたら、それはすべて差し上げます」と祈ったところ高値で売れました。対価すべて大観通宝

▲成願寺

だったので売れたことを感謝して売り上げすべてを奉納してしまいました。そのご利益でしょうか、それまで以上に働いて財を成したのです。長者となった九郎が早逝した娘の供養のために御堂（みどう）を建てたのが成願寺の始まりです。

鍋屋横丁を経て桃園へ

成願寺を出て山手通りを南下し神田川に架かる長者橋の手前を右へ。ジャスミンなど初夏の花々が咲き乱れる川沿いの小道には、いくつかの道標があり、彫られた文字を参加者同士解読しながら歩きました。月見橋まで来たら右に曲がって神田川を離れます。住宅地を歩き貴乃花部屋を左に見て通り過ぎ、再び青梅街道に出ます。西に進むと堀之内の妙法寺へと続く鍋横通りとの交差点です。料亭「鍋屋」は妙法寺参拝客で繁盛したため、今も鍋屋横丁と呼ばれているのだそうです。鍋横大通りを進み、妙法寺への道標として建てられた「お題目石」で再び文字判読に挑戦。商店街から離れ JR 中野駅に向かいますが、駅南側の高台は４枚目の挿絵に描かれた桃園です。将軍吉宗が享保20年、この地の眺めの良い場所に御立場（おたちば）を造らせ、桃150株を植えました。今は挿絵でその賑わいを偲ぶのみの住宅地です。

▲お題目石

今回の終点 JR 中野駅に到着しました。もともと中野駅周辺の土地は線路と同じ高さでしたが、現在の駅あたりを４ｍも掘り下げ、駅舎を桃園通り突き当たりから西に移して、南口だけだったのを北口も造ったのが昭和４年（1929）だそうです。駅前から線路を見上げて納得しつつ解散となりました。　　参加者118人。

【取材】文・写真：広報部会・大橋弘依

江戸東京博物館友の会特別観覧会（平成28年５月13日）

2016年NHK大河ドラマ特別展「真田丸」

ＮＨＫ大河ドラマ特別展「真田丸」の特別観覧会が５月13日(金)17時から開催されました。最初に担当の田原昇学芸員よりホールにて解説を聴講後、見学に入りました。この展覧会は大坂冬の陣において大坂城東南に出丸「真田丸」を築き、夏の陣で激戦の末生涯を閉じた勇将真田信繁(幸村)ゆかりの品や同時代の貴重な歴史資料が紹介展示されていました。古地図や有名武将の書状が多く、図録や音声ガイドの説明は大変助かりました。まず入口右に真田家紋「六連銭紋旗指物」、正面に袴姿の「真田信繁画像」一幅が飾られ、横に信繁所用とされる「馬具」、「六連銭紋馬印」、「頭形兜（ずなりかぶと）」が展示されていました。

第1章「武田と真田」

真田家伝来の「銅製陣鐘」と「陣具」が中央ケースに展示され、「川中島合戦図屏風」(江戸時代)には六連銭の旗指物と真田勢が描かれています。信繁の祖父幸綱は武田信玄の家臣として活躍し、武田信玄没後まもなく幸綱も亡くなり、跡を継いだ長男信綱も天正３年(1575)長篠の合戦で戦死。「真田昌幸画像」の昌幸(信繁の父)が家督を継ぎました。

第2章「第一次上田合戦から小田原合戦」

武田家滅亡後、真田家を守るために昌幸が織田・上杉・北条・徳川・豊臣に次々と従順した時代の書状が並んでいました。「小田原陣陣立」２点がケースに並び、豊臣陣の合戦準備の様子が伝わってきました。

第3章「関ヶ原合戦と真田」

大きな「関ヶ原合戦図屏風」があります。この合戦で、父昌幸と信繁が西軍、兄信幸(之)は東軍に属し、徳川勝利で父子は高野山(後に九度山)へ配流となります。

「関ヶ原合戦絵巻」(寛政３年・1791)写しには、馬に乗る真田左衛門佐幸村の姿が描かれていました。大変丁寧な絵巻で、皆さん興味深そうに見ていました。

第4章「真田家と桃山文化」

信繁の正室竹林院の生家大谷家よりの奉納品「鶴亀紋懸鏡」(文禄２年・1593)など当時の華やかな文化をうかがわせる品が展示されていました。

第5章「大坂冬の陣・夏の陣」

このコーナーは50点余りの展示品がありました。特に「豊臣期大坂図屏風」には華麗な大坂城と賑わう城下町が見事に描かれていました。冬の陣後埋められた堀から出土のたくさんの金箔の瓦を見て、敗者の哀れを感じました。仙台藩の事歴をまとめた『僊台武鑑』所収の「大坂冬の陣配陣図」には二つの曲輪からなる真田丸が描かれています。昌幸・信繁の蟄居生活での苦労を察する書状も目を引きました。その後信繁は大坂城へ入り冬の陣で活躍し夏の陣(慶長20年・1615)で戦死しました。幸村という名は江戸時代、軍記物等で広がったようです。

この展覧会は、７月２日から８月21日まで上田市立美術館で開催されます。　　参加者139人。

【取材】文・写真：広報部会・竹中祐見子

江戸博クリップ

科博のナゾ

展示事業係　学芸員　松井かおる（まつい　かおる）

４年ぶりにたてもの園から本館に戻ってまいりました。東京の東端に住んでいるので、「通勤時間が短くなってよかったね」と皆さんに言われるのですが、たてもの園への通勤では御茶ノ水から座って、ワンセグでＮＨＫの朝ドラを見る生活リズムができあがってしまったので、満員電車を２回乗り継ぐ江戸博への通勤はかなり苦痛です。時間の関係で朝ドラも毎日は見られなくなってしまいました。満員電車での身の処し方もようやく慣れてきました。

閑話休題。中学時代、夏休みの宿題対策で上野の国立科学博物館に行きました。入口に近い一角に、机が置かれて２人くらいの白衣を着た男性が座っていて、こちらが質問すると何でも答えてくださり、帰りには「白亜紀」「ジュラ紀」など聞きなれない年代の年表を印刷したしおりをくださったりしたことに感動したことから、博物館で働きたいと思うようになりました。「博物館で働くには学芸員の資格が必要」と聞き、学芸員資格を取得できて付属博物館がある大学を探し、入学すると、付属博物館に入り浸る毎日を過ごしました。その後めでたく準備段階の江戸東京博物館の学芸員となることができましたが、当時は資料収集の仕事に忙しく、その後は常設展示を作り上げることに忙殺される毎日で、中学時代の思い出は忘れ去っていました。それから数十年後、「江戸のモノづくり」という巨大研究プロジェクトに参加し、プロジェクトを牽引する国立科学博物館の主任研究官Ｓ氏と雑談の折、ふと思い出して夏休み、白衣姿で座っていらした親切な男性の話をしたところ、「そんな話きいたことないよ」とのこと。あの方たちは幻だったのでしょうか。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉖

[赤坂御門から崑崙山玉窓寺]

龍泉寺の子安観音菩薩

江戸郊外から中心部へ戻り、赤坂周辺を歩きます。今回の図会の記述は行きつ戻りつしていますので、順番を変えて回っています。歩いたのは新緑の風薫る５月半ばでした。

赤坂御門から円通寺の旧跡

東京メトロ永田町駅９ａ出口から地上に出ると、目の前の「空の広場」には紀州藩徳川家麹町邸の下水溝の一部が再現されており、広場から表通りに出たところには赤坂御門の石垣の一部が復元されています。石垣越しには、竣工したばかりの東京ガーデンテラス紀尾井町の建物がそびえていました。

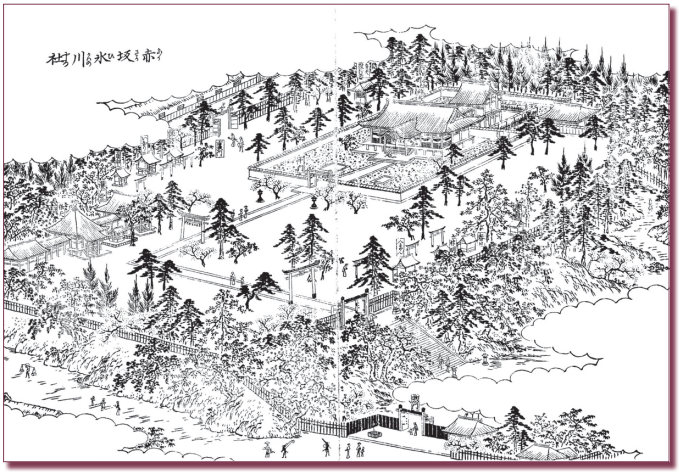
弁慶堀に沿って進み紀伊国坂の上りにさしかかると、左手に赤坂御用地(旧紀州藩徳川家中屋敷)の塀が見えてきます。残念ながら林に遮られて迎賓館は見えませんが、平成28年４月から通年公開が始まり、多くの人が訪れています。かつてこの地は赤色の染料を採る茜が群生していたため赤根山と呼ばれ、紀伊国坂も赤坂と呼ばれていました。これが赤坂の地名の由来になったといわれています。

坂下から豊川稲荷脇の九郎九坂を上って青山通りを渡り、一ツ木通りに入ります。道の両側は旧一ツ木町で、この辺りの広範な地名だった一木原の名残です。通りの中程には平河山浄土寺があり、参道入口には「六地蔵尊」と書かれた大きな赤提灯がつるされています。本堂の前には享保４年(1719)造立の「銅造地蔵菩薩坐像」があり、説明板によれば六地蔵尊とは「六道輪廻」からつけられた呼び名で、六体限定ではないそうです。

本堂脇から円通寺通りに出て右へ進むと円通寺坂の上りとなり、坂上に佛智山円通寺があります。この寺は元禄８年(1695)に当地へ移転していますが、その前には同名の別寺がありました。図会では「円通寺の旧跡」として古の円通寺にあった鐘のことが書かれていますが、その痕跡は全く残っていません。

今井古城の址から氷川明神社

坂下に戻り右の脇道に入ると、正面に赤坂サカスのビル群が現れます。元は松平安芸守中屋敷の跡地ですが、図会の「今井古城の址」では平安末期に今井四郎兼平の城があったと書かれています。手前の道を右に進んだ突き当たりの左手はくの字に曲がる三分坂の下りとなり、坂下には報土寺の築地塀が味わいのある姿を見せています。境内には江戸相撲の強豪大関・雷電為右衛門の墓があり、墓石の前には雷電が子供の頃に持ち上げたという十貫目石も置かれています。



▲長谷川雪旦　赤坂氷川の社

報土寺の横道は絵師・狩野興意(興以)の墓がある霊鳳山種徳寺へと続いています。本堂左手にあるひな壇状の墓地の階段を上っていくと、最上段の隅に目指す墓がありました。墓の脇には、興以を始祖とする紀伊狩野家代々の当主名が石板に刻まれています。

三分坂下から赤坂通を渡って途中を左折すると、ソフトタウン赤坂の一角に「勝海舟邸跡」の表示杭が立っています。海舟は安政６年(1859)から明治元年(1868)までここに居住しており、この時期に咸臨丸による渡米や、江戸無血開城の会談などが行われています。

本氷川坂を上っていくと、氷川明神社(現赤坂氷川神社)の社殿脇に出る入口があります。享保14年造営の権現造りの社殿は、赤坂の総鎮守にふさわしい風格を漂わせています。向かいの大イチョウはさらに古く、何と樹齢400年！　江戸幕府成立の頃からこの地を見守ってきたと思うと圧倒されました。また左手の階段を下ると四合稲荷神社があり、一ツ木の古呂故天神社境内にあった古呂故稲荷が合祀されています。

信康山龍泉寺から崑崙山玉窓寺

続いて赤坂から青山に移転した二つの寺を目指しますが、長い道のりなので近くの檜町公園で一休み。長州藩毛利家中屋敷の跡地に造られた公園ですが、池を中心とした景色は素晴らしく、ちょっとした都会のオアシスです。ここから再び青山通りを渡り、赤坂小学校脇の裏通りを道なりに進みます。特に目を引くものはありませんが、道の曲がりや起伏が変化に富んでおり、快適な散歩コースです。やがて青山公園横から外苑東通りを渡ると青山霊園に入ります。

すぐ右手に玉窓寺墓地を横切る道があり、抜けて左に行くと信康山龍泉寺があります。本堂の両端にはガラスの格子窓があり、近寄ってみると子安観音菩薩と黒薬師如来が安置されていました。どちらも良いお顔ですが、特に子安観音の穏やかな顔を見ていると、自然と心が洗われる思いです。明治20年に移転する以前の寺は一ツ木町にあったため「一木観音」「一木薬師」と名付けられていたそうです。

少し戻って左に折れた所が崑崙山玉窓寺で、こちらは紀州藩中屋敷南端の青山家の所より明治12年に移転しています。山門を入った左手には開基・玉総秀珍大姉(青山忠成の娘)の宝篋印塔が残されており、その先の近代建築の本堂と好対照を成しています。ここから東京メトロ青山一丁目駅に出て、帰路につきました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

友の会 特別企画

「絢爛豪華！大名行列を模した川上音二郎の葬列」

講師　高橋　繁行さん(ルポライター・画家)

◆オッペケペー節で有名な川上音二郎が亡くなったのは明治44年(1911)11月11日。弔いは大名行列様式の野辺送りで、北浜の帝国座から逢坂の一心寺まで約6キロを長蛇の行列だったといいます。その様子を明治の商都大阪の風景とともに再現した34枚の切り絵(高橋講師作)を映しながら、解説していただきます。珍しいテーマで2年ぶりの特別企画です。皆さんお誘い合わせの上、奮ってご参加ください！

◆講師略歴：たかはし・しげゆき

1954年京都府生まれ。ルポライターとして科学、人物、笑い、葬式を主要テーマに取材・執筆のかたわらイラストでも活躍。著書に『葬祭の日本史』(講談社)、『猛虎なり』(洋泉社)、『ドキュメント現代お葬式事情』(立風書房)、共著に『マンガ超ひも理論　我々は4次元の膜に住んでいる』(講談社)など。

- 開催日時：7月30日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：7月21日(木)必着

※なお、今回に限り受講票はお送りしませんので、受付でお名前を告げてください。

- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：先着300人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員、同伴者とも無料

【企画担当責任者】林　正信(事業部会)

古文書講座

◆9月から第2期を開講

9月から下記日程で開講します。受講は自動継続ではありません。改めてお申し込みください。また申込はがきは1講座ごととして、**申込の受付は7月末まで**です。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：9／7(水)、10／5(水)、11／2(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9／21(水)、10／19(水)、11／16(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：9／24(土)、10／22(土)、11／19(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

◆28年度第1期の残日程

入門編7／6(水)、初級編7／20(水)、中級編7／23(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会セミナー

第166回「将軍の印章」

講師　西　光三さん(板橋区公文書館公文書館専門員)

◆江戸時代、将軍や大名などの為政者たちは、政治的な決断や意思を伝達するために、数多くの文書を発給しました。そしてそこには、為政者が出した文書であることの証拠となる「花押」や「印判」が必ず据えられていました。この花押や印判についての知識があれば、文書に対する理解はさらに深まります。そこで今回は、徳川将軍家の印章「御印判」を事例に、御印判の製作過程とその役割や機能について考えていくことにします。

◆講師略歴：にし・こうぞう

立正大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程満期退学。現在、板橋区公文書館公文書館専門員、武蔵野大学教養教育リサーチセンター研究員。専門は日本近世史。主な論文に「近世大名家における葵御紋統制令の受容と展開」(『立正史学』第96号)、「将軍徳川慶喜の御印判製作過程と御用達町人」(『日本歴史』第784号)。

- 開催日時：7月16日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：7月7日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】内田勝元(事業部会)

第167回「渡し舟から橋梁へ ー明治初期の架橋事情ー」

講師　斉藤　照徳さん(江東区文化財専門員)

◆江戸東郊地域は南北に隅田川が流れ、内陸には掘割が張り巡らされていました。水路の発達は江戸の物流を支えましたが、一方で住人に「川を渡る」という交通課題を与えました。江戸時代は、いくつかの要因から架橋が困難な場合もあり、代わりに「渡し舟」が用いられました。維新後、明治政府は架橋を推進しますが、民間や町村による事業を奨励したため、架橋事業は地域内外の人々を巻き込み、建設地は事業利害へのさまざまな思惑が交錯する場となっていきます。

◆講師略歴：さいとう・あきのり

東京都出身。駒澤大学大学院後期課程単位取得退学。現在江東区文化財専門員、駒澤大学非常勤講師。「武州葛飾郡小梅村三囲稲荷の経営と越後屋三井家」(『地域史・江戸東京』岩田書院、平成20年)「明治初期の中川逆井渡船場の橋梁化」(『江東区文化財研究紀要』18、平成26年)『東京の道事典』東京堂出版(共著、平成21年)。

- 開催日時：8月20日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：8月8日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明・平野浩子(事業部会)

第 168 回「徳川水軍と向井将監」

講師　鈴木　かほるさん(歴史研究家)

◆徳川家康が関八州に封じられ、この広大な東国の大地を背負った時、何を心に描き、水都江戸の開発に挑んだのでしょうか。それは、おそらく天下統一を視野に入れた城下町の建設であり、城下に家臣団と町人を雑居させ、江戸内海を海運交通の本拠地として、徳川水軍に警護させることでした。そのために徳川家康は、近世的ともいえる大改革に踏み切っています。さて、それは？…。400年前の江戸に思いを馳せて、お話いただきます。

◆講師略歴：すずき・かほる
神奈川県在住。国学院大学文学部史学科卒。中世史専攻。元 NHK 文化センター講師。テレビ・ラジオに出演。三浦一族研究会特別研究員。日本海事史学会などに所属。著書、『史料が語る向井水軍とその周辺史』等向井関連他、『徳川家康のスペイン外交』、『相模三浦一族とその周辺史』。

- 開催日時：9月10日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：9月1日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第10回(平成28年度 第1回)

練馬区立 石神井公園ふるさと文化館を訪ねる

◆『江戸名所図会』の挿絵にも描かれた三宝寺池と人工の石神井池の間に平成22年3月開館した博物館です。石神井公園という極めて自然環境に恵まれた場所にあり、展示は練馬区の歴史や伝統文化をたっぷり紹介していて来館者を飽きさせません。周辺の樹林散策も楽しめます。児童文学作家「いぬいとみこ」の特別展も開催中です。

- 開催日：8月10日(水)13時～13時30分　受付
- 開催場所：練馬区立 石神井公園ふるさと文化館
  (練馬区石神井町5-12-16)
- 学　習：13時30分～15時
  館の沿革・特徴等についての講義と見学
- 交通アクセス：西武池袋線「石神井公園」駅下車徒歩15分/
  西武新宿線「上井草」駅下車徒歩20分
  ＊両駅間を結ぶ西武バス「JA 東京あおば」下車徒歩5分もあり
- 申込締切：7月14日(木)必着
- 定員：60人(会員のみ)　定員を超えた場合は抽選、
  希望に添えないこともあります。
- 参加費：会員500円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

催事のお申込方法

◆**普通はがき**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

会員優待のお知らせ

●**特別展**

「大妖怪展　土偶から妖怪ウォッチまで」

会　期：7月5日(火)～8月28日(日)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●**特別展**

「よみがえれ！　シーボルトの日本博物館」

会　期：9月13日(火)～11月6日(日)
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生900円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●発掘された日本列島2016

会　期：6月4日(土)～7月24日(日)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

休館日

7月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第92号
平成28年7月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話 03-3626-9910